

# 舞台監督研究室



発行 舞台監督研究室 2022年4月27日 第3号

## 付き合い方

森 肇

付き合い方とはコミュニケーションの取り方だと思います。とても難しい問題が山積していますが、基本を考えることが重要な気がします。

プロデューサー、演出家、俳優、各プランナー、助手達、各業者、各劇場とのコミュニケーションの取り方は基本的にフラット(上下関係はない)ではないでしょうか？ここには日本の教育の問題があり、親の方が上、先生の方が上、年配者の方が上、のような教育がされているような気がします。

そこで各人とのコミュニケーションの取り方で大事なことは、各人の仕事の内容をよく把握することが一番です。演出家の考え方、俳優の取り組み方、各プランナーの今までの作品、助手達のスキル(ヒューマンスキル+テクニカルスキル)各業者の強みと弱み、各劇場の長所と短所、このことを調査することが大事です。そして、人の言葉だけでなく表情等を「見る力」「感じる力」を育てることが必要でしょう。

これはどうすれば育てられるかは個々で違うと思いますが、本を読んだり、絵画を見たり、映画を見たり、音楽を聞いたりすることで養われていくような気がします。

コミュニケーションを多くとればいいわけではないと思います。過度なコミュニケーションは言葉の重みを失い、友達化の原因になります。「嫌われたくない」と思うのは当然ですが、本当のコミュニケーションを取ろうと思えば嫌われるのはある程度は仕方がないと思います。

どんな集団であれ、組織であれ、それぞれの人の立場があり、その中で嫌われることを言わなければならない時はあると思いますし、言う必要があると思います。そして、自分と波長の合わない人、自分と意見を異にする人、自分に従おうとしない人を排除しない。その人達の発想や考え方をよく聞き、取り入れる許容力が必要です。ただ、「大局観」を外さずに聞き入れることが大事だと思います。

次に演出家、各プランナーと話すときに「どうしましょう？」と言うのは「私は何も考えていないバカです」と言っているのと同じです。A案、B案、C案ぐらいを提示することが大事です。そして演出家、各プランナーがA+C案と言われたら、その案の長所と短所を提示するのです。助手と話するときにも助手からA案、B案を提示されたら、各案の長所と短所を話し、助手に決めさせます。そして、問題がどこに出るか？を考えバックアップを考えておくことです。

ただ、新しいことを始める場合、「なんとかなるさ」と思うこ

とも重要です。「これしかない」と思い込んでいると間違ったときに修正し、後戻りするのが難しくなってきます。「なんとかなるさ」と思っていれば失敗しても別の選択がしやすくなるような気がします。「なんとかなるさ」と思えば楽しいことに出会う可能性が高くなります。

そして、「面白い」と思うことで主体性や実行力が生まれてくるような気がします。

自分で考え、目標を立て、実現するためにやらなければならないことをリストアップし行動することが大事だと思います。(終)

## 人付き合いの話

浅香哲哉

同業の先輩や後輩、色んなスタッフの人々、はたまた演出家やプランナーの方たち、そしてプロデューサーやアルバイト、更に裏方以外の役者やその他の出演者に至るまで。そんな様々な人たちとの付き合いが、本質的な芝居作りよりも、実は仕事の全てのよ

うな気がするの、演劇に対する愛情が私には少ないからだろうか。

ある役者から「演劇を愛していない」と叱責されたことがあるが、その時は「あなたが愛しているようには愛していない」と屁理屈を言っておまかしたけれど、実際はその通りだったのかもしれない。

どのように仕事を進めていくのか、How toがあって、「やること」と「やり方」分かっていたとしても、実際は具体的な様々な人付き合いの中で、仕事を進行していかなければなら

### TSUBUYAKI

私はコロナにビビっている。Ba.2だのXEだの変異株が出るたびに怖さを更新している。ワクチンにもビビっている。1年に3回も4回もワクチン打って大丈夫なんかいな。

罹るだけか罹って集団免疫にすることで収束的風潮にもビビっている。

コロナが収束したらどこ行こう、何しようかと考えている人が多いが、感染症はなくなるので、それもビビっている。

政商うごめく企業だけが潤っている現状や、首長たちのフリップとキャッチフレーズも(この頃は打つ手がないので減ったけど)なんだかなあ〜とビビっている。

演劇界も体力のないところは青息吐息どころではなくなっている。打ち合わせなどもZoom流行りで、ルーターの無い私は…お呼びがないのでいいんだけど…。

こんな気弱で舞台監督が務まるのかということももちろん務まっていない。

サン・シャン・ス

ない。

私の人付き合いや立ち回り方についての考えは、『舞台監督読本』のなかの、「視点とスタンス」で言及したこと以外にない。と、偉そうに大上段に構えてみても、水品春樹先生が言うところの舞台監督像から限りなく遠い不出来な身にとっては、現実には己の信じたK・K・D・H(経験・感・度胸・はったり)に基づいて、スタッフ内の位や長幼の序も、演出家やプランナーの芸術性も、役者の見栄やプライドも、プロデューサーの金欠病的脅しも、相手の顔色や所作や言質を観察した上で、集めた情報を最大限に利用して、乗り切る他に術を知らない。

KKDH。演劇の中では皆対等だとは思っていても、余計なことは言うくせに、言いたくても言えない性分。そんな私が話せるとすれば、経験談でしかないように思える。

### 様々な経験

舞台監督以外の経験や、ギャラを貰うようになる以前の時代も含め、長い間ただひたすら好かれるように生きてきた。そのためには演劇を愛しているとも言うし、正しいと思われることを毅然と主張したことさえある。

しかしそれは打算だった。とても親しくしていたある人に、「あなたは友達ではない、仕事の仲間だ」と言って、とても悲しい顔をされたこともあったが…。(後に、仕事を一緒にすると必ず一番ぶつかり喧嘩もできるような仲になり、今では仕事を離れての呑み友達になった)

誰ともでも飲みにも行くし、金も使えるだけは使う。ゴマもする。すべて上手くやるためだ。

これは方便ではない。バイトに対しても、力を最大限に発揮して貰うためにメンバーを見て、人事コンサルタントさながら人心掌握して利用しようとする。

もちろん、最初から上手くいくわけではない。失敗の連続。そうして学んできた。それは具体的な経験でしか語れない。恥ずかしながら数々のとんでもない事故にも遭った。トチリもした。みんなに好かれようとしても、おそらく敵もいっぱいいるだろう。確かにいる。二度と顔も見たくないと思っている人も多いだろう。それでも、誠意は必ず通じると信じて、仕事が上手くいくように今日も人のご機嫌を伺って生きていく以外の術が思い当たらない。(終)

## 先輩との付き合い方

杉谷昌洋

### 先輩との付き合い方

先輩演出部とはご一緒する機会が少なく過ぎてきました。他セクションとの先輩陣との対応としては、「どう懐に飛び込むか」を考えて、資料のやり取りのタイミングや作成、打ちあわせの振る舞いを考えて進行。

プランナーさんもですが、現場に出てくるアシスタントさんや現場チーフさんとの関係性構築に尽力。

これと言って具体的な言葉にできませんが、先方が気にしそうなことを予め拾っておくだけでだいぶ関係性はよくなるのではと思います。(実際に先方がどのように感じているかは分かりませんが)

### 後輩との付き合い方

基本は本人がどこまでのことをやるのか、やれるのかを様子を見ながら少しずつ渡すものは渡すイメージでしょうか。最初からどこを任せるか決めないで走らせるような形です。方法論としては、大きな現場になってしまうと時間的ロスやトラブルが発生してしまうのでちょっと向かないかとは思いますが、小劇場ベースで活動しているうえでは後進育成を考えると悪くないやり方と考えています。

若い人はあまり踏み込み入られることを嫌う傾向にあるような気がします…

### バイトとの付き合い方

アルバイトさんは基本的に大事にしています。入り～スタンバイ、休憩、上り時間はきちんとコミュニケーションをとるように、本人たちが現場で迷子にならないようなイメージでしょうか。

動かすときは若干乱暴にあつかってしまうときもありますが…、作業終了後は御礼を伝えるように努めています。

### 制作との付き合い方

踏み込みすぎるとかわされ、踏み入らなさすぎると嫌われ。程よき距離感を探りながらのパートナーといったイメージです。(終)

### 情報コーナー

☆事業復活支援金(経産省 HP 要チェック)

☆『千と千尋の神隠し』 全国巡演中

☆朝倉展 6月12日まで神奈川県立近代美術館葉山館

6月26日～8月14日 練馬区立美術館

『舞台監督読本』税込み 1,100 円  
全国書店、Amazon にて発売中  
当舞台監督研究室でも取り扱っております



### 一編集後記一

第1号の座談会の際に寄せられたコメントを掲載しました。関係性の構築は職務の大きな軸であろうと思います。連絡先もない舞台監督研究室ではありますが、口コミを使って皆さんのご意見、情報などお寄せください。(み)